

国立がん研究センター東病院肝胆膵外科

杉本 元一



私は日本肝胆膵外科学会留学制度の第九期生として、現在アメリカ留学をさせて頂いています。アイダホ州の州都ボイシーにある St. Luke's Health System (以下 St. Luke's) で1年間の研修が終了し、2014年12月よりミネソタ州ロチェスターにある Mayo Clinic での研修を開始したところです。この度留学便りを書く機会を頂き、今回はこれまで1年間過ごしたアイダホ州ボイシーおよび St. Luke's での私の経験をまとめさせて頂きたいと思います。

St. Luke's は Traverso 先生が現在おられる施設です。Traverso 先生は幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を提唱されるなど、言わずと知れた膵臓外科の世界的権威ですが、2010年にシアトルの Virginia Mason Medical Center から異動されて、St. Luke's で Center for Pancreatic and Liver Disease を立ち上げられました。現在は Dr. Barton とのスタッフ2人体制です。私は2013年10月より研修を開始しました。本留学制度におきましては私が St. Luke's に来る初めての留学生となりますが、病院としても外国からの医師を受け入れるという経験がほとんどないようで、当初は生活のセットアップや仕事環境の確立まで、私自身初めての留学生活に困難を感じることもありました。しかし雄大な山に囲まれたこの人口21万人の地方都市は、大自然とおおらかな人々の良く調和した環境で、治安も非常に良く、すぐにとっても居心地良く感じられるようになり、非常に充実した日々を過ごせるようになりました。

St. Luke's は研究や教育のための施設ではなく大規模な総合病院で、レジデントやフェローもおらず、私は一日の半分は Traverso 先生と院内で常に行動をとともにしていました。毎朝入院患者さんの状態を電子カルテで確認後、6時半より回診して、放射線診断部で放射線科医とともに入院・外来患者さんの画像所見をチェックして、10時頃より外来という流れでした。Traverso 先生は今なお臨床に非常に従事していらっしゃる、患者さん一人一人を時間をかけてとても丁寧に診察され(通常30分、新患は60分)、1日に数回は病室を訪れて、患者さんとそのご家族とのコミュニケーションをととても大事にされています。手術は膵切除が年間20-30件で、自由に見学をさせて頂きました。膵頭十二指腸切除術における膵空腸吻合では全症例で microscope を使用されています。膵癌治療に関しては、化学療法が進歩しつつある今、高度に進行した症例の根治切除にこだわるわけではなく、膵癌発症リスクの高い患者さんの早期発見・早期治療にも重点を置かれている印象を受けました。

St. Luke's では重症膵炎の入院患者さんが多く、3-6ヶ月以上の長期にわたり入院している患者さんも常において、Traverso 先生は内科、消化器内視鏡科、感染症内科、放射線科診断部、放射線科 IR (interventional radiology) 部を総括するような形で患者さんを担当されていました。週1回の Pancreas Care Conference では各科の意見とともに Traverso 先生の知識や経験を踏まえた多くの知見を吸収することができました。

私は毎日午後は主に臨床研究を行っていましたが、Traverso 先生と毎朝回診の合間に一緒に朝食を摂る時間に、私の研究の日々の進捗状況を確認して頂き、方向性や解析結果について議論をさせて頂きました。臨床現場では各科の医師やコメディカルたちと密に連携しつつフットワーク軽く院内を駆け巡る姿、臨床研究においては目の前にいる患者さんと臨床的事象から新たな解決法を導き出そうとする姿勢に臨床医としての真髄を感じました。

私は研修開始当初は Center for Pancreatic and Liver Disease のこれまでの全受診患者さんのカルテをレビューし、データベース作りから着手させて頂きました。それと平行して徐々に自分自身の研究テーマも進めていき、「重症膵炎患者に対する経皮的ドレーン管理」、「重症膵炎患者の長期的合併症」「膵切除術後合併症のリスク因子、特に硬膜外麻酔との関係」、「膵頭部癌の治療成績」などについてデータ集積と解析を行い、いずれも学会で発表をさせて頂き (the 2014 Pancreas Club meeting 2014 in Chicago, the 2014 Idaho Gut Club meeting in Sun Valley, and the 2014 American Pancreatic Association meeting in Hawaii)、また論文作成も進めています。特に重症膵炎患者の治療に関しては、従来のような necrosectomy は一切行わずドレーン管理のみで致死率 0%を実現しており、画期的な治療方針といえると思います。この研究内容は Surgical Endoscopy 誌に掲載予定です (Epub Jan 29, 2015)。

アイダホはとても自然が豊かな場所で、夏にはトレッキングやフライフィッシングも楽しむことができました。Traverso 先生も大好きというグラン・ティートン国立公園やイエローストーン国立公園とも近く、動物や絶景を堪能することができました。Traverso 先生と奥様、ご家族にはいつもとても温かく接して頂き、大変お世話になりました。御邸宅に招待して頂き、アメリカの温かい家庭の日常を体験させて頂いたことにも大変感謝しています。また、Traverso 先生と担当させて頂いた多くの患者さん達との交流は、一生忘れ得ない思い出になりました。アメリカでの良好な医師・患者関係の構築を肌で感じる事ができました。更に、非常に親身にお世話頂いた Center for Pancreatic and Liver Disease のスタッフおよびそのご家族の方々にも大変感謝しております。

アメリカで1年の研修を終えて特に感じることは、これまで本留学制度で留学された先生方の礎があり、更に日本の医療、特に肝胆膵外科領域におけるアメリカ側との強い信頼が築かれているからこそ、私もこちらで温かく受け入れて頂き、貴重な体験ができているということです。この場をお借りしまして、本留学制度を創設された高田教授、川原田教授、羽生教授、これまで本留学制度で留学された先生方、佐野教授をはじめとする国際交流委員会歴代理事の先生方、サポートして下さっている学会会員の皆様、日本肝胆膵外科学会事務局の皆様に厚く御礼を申し上げます。引き続き本留学制度でできる限り多くのことを吸収し、今後の外科医人生に活かし、日本と世界の医療に貢献できるよう、頑張りたいと思います。

2015年1月 ミネソタ州ロチェスターにて



St. Luke's Health System  
Regional Medical Center, downtown, Boise.



ボイシーのダウンタウン。旧駅舎からの眺め。



Traverso 先生ご夫妻と、  
Panreas Club 2014, Chicago にて。



Center for Pancreatic and Liver Disease  
のスタッフと。



Dr. Traverso と Dr. Barton と。



Ms. Shedd, PA-C と Dr. Traverso と。